教育の森
— Kyoiku no mori —

東日本大震災10年

「あの日」に学び　「あした」を守る

英語

世界中に思いをつなぐ

東日本大震災から防災を考える「『あの日』に学び『あした』を守る」の第９回は英語。震災の津波は宮城や岩手の子どもたちに人気だったアメリカ人の外国語指導助手（ＡＬＴ）２人の命も奪いました。しかし、「日米の懸け橋になりたい」という２人の思いは、家族や教え子らによって受け継がれ、今も生き続けています。被災地から震災を海外の人にも発信するイギリス人の伝承施設館長や、言語の壁を越えて思いを分かち合う日米の被災者たちの言葉に耳を傾けます。【百武信幸】

生き続ける「日米の懸け橋」

Taylor was living her dream in Japan and one of the next dreams she wanted to fulfill was to return to America and be a bridge between our two countries.
テイラーは日本で夢を生きていましたが、次の夢の一つは、アメリカに戻って両国の懸け橋になることでした。
She'll always live on as we emulate her everyday.
私たちが毎日彼女を見習えば、彼女はいつまでも生き続けるのです。（テイラー・アンダーソン記念基金編「Live Your Dream 夢を生きる」より）

I am grateful to the people of Rikuzentakata.They not only welcomed Monty as a person and teacher,but also as a friend and a part of their families.This community gave him a second home.
モンティを一先生、一個人としてだけではなく、友達や家族の一員のように温かく迎え入れた陸前高田の皆さんに感謝しています。皆さんのおかげで、陸前高田がモンティの「第二の故郷」となりました。(自治体国際化フォーラム「ＪＥＴからの手紙2017」より、姉のシェリー・フレドリックさんのスピーチ)

被災前、石巻市の高台で笑顔を見せるテイラーさん＝テイラー・アンダーソン記念基金提供

引用した英文、少し難しいかもしれませんが、dreamやbridgeなど、知っている単語から意味を想像しながら読んでみてください。東北の地で今も愛される２人の先生の家族がつづったことばです。

１人目は、宮城県石巻市の幼稚園や小、中学校で英語を教えた女性、テイラー・アンダーソンさん（当時24歳）の両親が本に寄せたメッセージです。テイラーさんは震災の時、児童らを高台に避難させた後、津波の犠牲になりました。両親は「日米の懸け橋になりたい」と願っていたテイラーさんの思いを受け継ぎ、アメリカで集まった寄付金で基金を作り、石巻市内にある学校の支援を始めました。その一つが、学校に本や本棚を贈る「テイラー文庫」です。

本棚はすべて同市の木工作家、遠藤伸一さん(52)が作っています。震災で３人の子を突然失う悲しみに直面しましたが、３人ともテイラーさんの教え子だったことから本棚製作の依頼を引き受けました。素材は温かい手ざわりが特徴で、テイラーさんの母国・アメリカを代表するセコイアの木。遠藤さんは「テイラー文庫を作ることで自分の生きる意味をみつけた。石巻の子どもたちが喜んでくれるものを作ることが、自分の子どもたちの生きた証しになると思えるようになった」と振り返ります。

もう１人は岩手県陸前高田市の小中学校でＡＬＴを務めていたモンゴメリー・ディクソンさん（当時26歳）。地域でボランティアの英語教室を開いたり、イベントに積極的に参加したりして子どもたちや地域の人たちから「モンティ先生」と親しまれていました。

岩手大と立教大が2017年、同市に交流拠点を開設し、モンティさんをたたえる「モンティ・ホール」をつくりました。引用したのは完成を祝う式典で姉のシェリー・フレドリックさんが読み上げたスピーチの一部です。モンティさんもまた「日米交流の懸け橋」が夢でした。その思いがホールとなっただけではなく、母校のアラスカ大アンカレジ校では「モンティの明日への架け橋」という日本語を学ぶ学生向けの教科書も生まれました。

テイラーさんとモンティさん。２人の思いは被災地に生き続け、日米で関わる人たちの背中を今も優しく後押ししています。

イラスト・にしむらかえ

間違える勇気を持とう

I've decided to go back.
私は帰ることにしました。（リチャード・ハルバーシュタット著「前を向いて、歩こう。」）

Tsunami come, go to high place.
津波が来る、高いところへ。

石巻市の伝承施設館長を務めるリチャードさん＝石巻市中央の同館で、百武信幸撮影

震災後、母国に帰らず宮城にとどまる決意をしたイギリス人の男性がいます。石巻市中心部で「復興まちづくり情報交流館中央館」の館長を務めるリチャード・ハルバーシュタットさん(55)。1993年から石巻で大学教員を務め、震災直後、原発事故の影響を心配した英国大使館から一時帰国を勧められた時、仙台まで向かいましたが、迷った末、大使館の人に伝えたのが、I've decided～という言葉でした。

このgo backは「帰る」という意味。大使館の人から「安全な場所に行かれるのが何より」と言われたリチャードさんは、あわてて「イギリスに帰る、のではなく、石巻に帰る、ということです」と伝えます。リチャードさんにとって、石巻は古里と同じ「帰る」場所。津波で親しかった夫妻を亡くし、２人を悼む思いが石巻に残る決断を後押ししたそうです。

そんなリチャードさんは2015年から震災伝承施設の館長となり、震災前の石巻や復興する姿を日本語と英語で伝えています。被災地には震災後、犠牲者を追悼しようと、海外からも多くの人が訪れます。彼らにまず伝えるのは「震度」という言葉。日本で地震の揺れの強さを示す尺度として使われる言葉ですが、他の国では使われていません。ちなみに津波は英語でもそのままTsunami。東日本大震災や2004年のスマトラ沖大地震などを通して津波の恐ろしさが知られ、世界各国で一般的に使われるようになりました。

石巻には田代島という離島があり、たくさん猫がいる「猫島」としてインターネットで世界中に広まり、多くの外国人が訪れるようになりました。また地震が来て大津波警報が出た場合、日本語が苦手な外国人にどう避難を呼びかけるかが、大きな課題です。

二つ目の文はリチャードさんが考えてくれた避難の呼びかけです。実は文法的には正しくなく、本来は「A Tsunami will come, run to high ground」などと言うべきですが、「正しい英語と通じる英語は違う」とリチャードさん。日本の学校では避難訓練は当たり前ですが、海外では一般的ではなく、リチャードさん自身、幼い頃にしたことはないそうです。「迷って何も言わなければ絶対に通じない。間違える勇気を持ってほしい」と呼びかけています。

言葉の壁を越えて

When you left home today,did you say "Be back soon!"？
家を出るとき「行ってきます」とあいさつしましたか？
Tomorrow is a Miracle! So Let's live for today.
明日は奇跡。だからきょうをともに生きよう。
（高橋匡美さんの英語の語り部より）

To our friends in Japan,United by Remembrance and Hope
日本の友へ、希望と追悼を通じ一緒に頑張りましょう
（９・11家族会が被災地にあてて送ったメッセージ）

皆さんの古里はどんなところですか。宮城県塩釜市に暮らす高橋匡美さん(55)の語り部は、こんな言葉から始まり、そして「行ってきます」のあいさつをしたか尋ねます。普段と変わらぬ一日を、突然襲った震災。「遠くの世界ではなく、あなたにも起きることなんだよ」と身近に想像してもらうために、そう語りかけるそうです。

匡美さんは、石巻市南浜地区の実家にいた両親を津波で亡くしました。悲しみに沈み、生きることが苦しい日々を過ごしていたある時。自分の経験を語ると涙を流して聞いてくれた人がいました。勧められてスピーチコンテストで話したところ多くの共感を呼び、ニューヨークのイベントで話す機会をもらうと、海外の団体から語り部案内の依頼が来るようになりました。

最初は、匡美さんが日本語で語り、通訳をお願いしていました。しかし、通訳の人が泣いてどうしても話が止まってしまう。「自分は息を止めて待つだけなのがもどかしくて。ならば自分で伝えよう」と、そこから英語を学び始めました。

英語で語り部活動をする高橋匡美さん。背後にある自宅の壁には、練習のため書いた英文が一面に張られている＝本人提供

海外の人からはほぼ必ず「話してつらくないのか」と聞かれるそうです。「もちろん苦しいが、聞いてもらうことで心が癒やされ、救われる方が勝る」と答えるそうです。また「悲しみをどう乗り越えたの？」という問いかけには「乗り越えていないし、一生乗り越えられない。いい年のおばさんだってずるずる引きずって生きていてもいいんだ」と返すそうです。外国の人にも心を込めて話すと、身を乗り出してくるのが分かるそうです。

「明日は奇跡」という言葉には「今日を大切に生きて」という匡美さんの願いが込められています。

震災後、国境や言語を越えたつながりも生まれました。2001年のニューヨーク同時多発テロの被害者や遺族でつくる「９・11家族会」は震災後、宮城や福島を訪れ、被災者と交流しています。石巻市の佐藤美香さん(46)が津波で幼稚園児だった長女を亡くした経験を語ると、テロで崩壊したビルのすぐそばで働いていたジネット・グティアレスさんは共感し、「亡くなった子どもたちの記憶はニューヨークでも生き続ける。私は生かされた意味を考え、これからも語り続けたい」と話しました。美香さんは「言葉の壁はあっても、経験した思いは変わらない」と心通わせています。